

沖縄の地域水系基盤をたずねる旅

地域水系基盤の計画・デザインと川まちづくり



2022年11月13日

第66回土木計画学研究発表会・秋大会

参加者の皆さまと



嘉数高台公園



北東を望む

嘉数高地は太平洋戦争の際、日本軍のトンネル陣地が構築された場所であり、現在でも数々の壕が残っている。頂上付近には戦死した住民や兵士へ向けた慰霊碑が幾つか建立されている。

ここから望むと否応なしに目に入るのは米軍の普天間基地である。宜野湾市の約26%を占め、まちの東西を分断するように横たわる。ずらりと並ぶオスプレイや基地を監視する拠点があった。



中城城跡にて

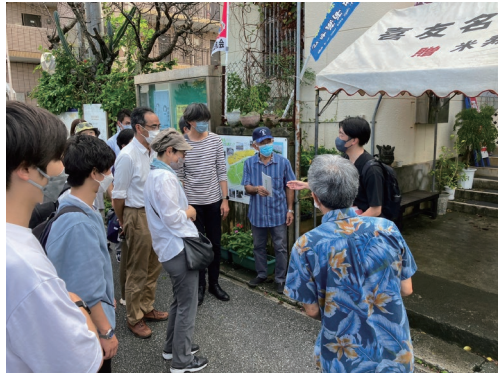


市による返還に向けた取り組みの紹介サイン



痛々しい弾痕が残る

喜友名泉（ちゅんなーがー）



県庁の鎌溝さんとお義父さま、自治会長の新垣さん

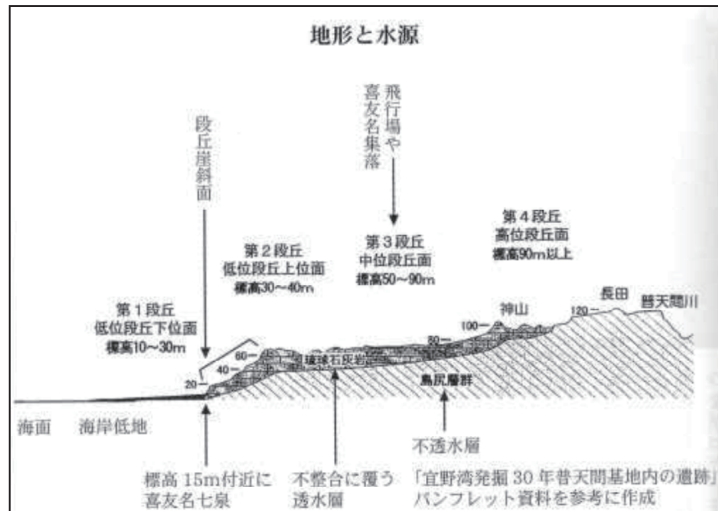


県道 81 号線のすぐ脇に喜友名泉の入り口はある

喜友名地区には喜友名七泉（ちゅんなーななかー）と呼ばれる7つの湧泉があるが、そのうちここにあるウフガーとカーグラーは喜友名泉として大切に保護されるとともに、国指定重要文化財である。喜友名泉と集落の高低差は約 25m あり、カーピラという 120m もの石畳が続く。維持管理が続けられているが、最近では米軍基地からの有機フッ素化合物 (PFAS) による汚染がみられるという。集落の立地する石灰岩段丘は透水層で、降雨はほどなく浸透する。浸透した雨水が地下水となり洞穴を造りながら流れ、不透水層に達した時点で湧き水として地表に出るのが泉（カー）である。喜友名は区域内に豊富な水源があるものの、地形の制限から水の運搬や利用に幾多の困難を伴いながら生活していた。このような事情が幾多の琉歌の誕生、他ムラからの嫁が来ることの妨げなどに繋がっていた、と言われている。



宜野湾市による保存修理が行われた旨の記載があった



喜友名集落から喜友名泉に至るまでの模式断面図（喜友名字誌より）

琉球石灰岩の大きな板石が使用され、優れた石造技術が垣間見える。

ウフガーは布積み（長方形に切り出した石を積み上げる方法）を基調としている。若水（ワカミジ、元日に初めて汲む水）や産水（ウブミジ、子供が生まれたときに使う



普段立ち入ることは出来ない



石畳は滑りやすく当時の苦勞が伺える

水）を汲むときなど、村人の生から死に至るまで常にかかわる聖なるカーであった。他には牛や馬の水浴びにも用いた。

カーグラーは布積みとあいだ積み（多角形に切り出した石を積み上げる方法）を基調としている。広範な利用がなされ、喜友名の女性たちにとって社交の場となっていた。男性は飲料水を汲むときだけ入ることを許され、朝、小学生以上の子どもは学校に行く前ここで水汲みをするのが日課であった。

真ん中の大きな台石は木がはめ込まれた洗濯台となっており、そのくぼみにシークワサーの汁を入れ芭蕉等の着物を浸け洗ったという。東側壁の台石は俎台となっていて野菜を洗うのに利用していた。さらに階段側の台石は髪を洗う場所であった。このようにウフガーに比べ儀礼的な役割は低いものの、最も利用頻度の高いカーとして親しまれていた。

なお、他人より早くカーに行くとき、水の精を眠りからさますためにカーに石を投げてから入ったという。また、東側壁の後方にはクチャグラーという三角形の空間があり、女性の脱衣所として使用されていた。



ウフガー（イキガガー、男泉）



カーグラー（イナグラー、女泉）

喜友名の石獅子群



トゥクイリグラー前のシーサー



クラニーグラー前のシーサー

喜友名地区を取り囲むように置かれた七体の石彫りの獅子像（シーサー）があり、市指定有形民俗文化財に登録されている。シーサーには、集落や屋敷内へ厄や忌み嫌われるものが入らないようにする「反し（ケーシ）」としての役割がある。喜友名の集落が基盤型の集落になってから、18世紀以降に普及したものと考えられている。

喜友名地区の村獅子は県内最多であり、面構えや形から様々な表情を見ることが出来る。現存するシーサーのその正面が向かう所を調査すると南向きが多く、火山や高い山、怪物のような大岩、不気味な場所があるという。

他に集落の西側にはヒージャーグーフーという石像があり、隣町の大火が喜友名まで及ばないように設置された、集落の拡大にあたって置いた、などの伝承が残る。



案内板に描かれたシーサーの顔



イリグラー前のシーサー

中村家住宅



ヒンブンと呼ばれる目かくし



高倉にはネズミ返しがついている

18世紀中ごろに建てられたといわれ、戦前の沖縄の住居建築の特色を殆ど残すことから国の重要文化財に指定されている。建築構造は鎌倉・室町時代の日本建築の流れを伝えるが、各部に独自の手法が加えられ、士族屋敷の形式に農家の形式である高倉、納屋、畜舎等が付随した沖縄由来の遺構である。南向きの緩い傾斜地を切り開いて建てられており、東・南・西を琉球石灰岩の石垣で囲い、その内側に防風林の役目を果たしている福木を植え、台風に備えている。

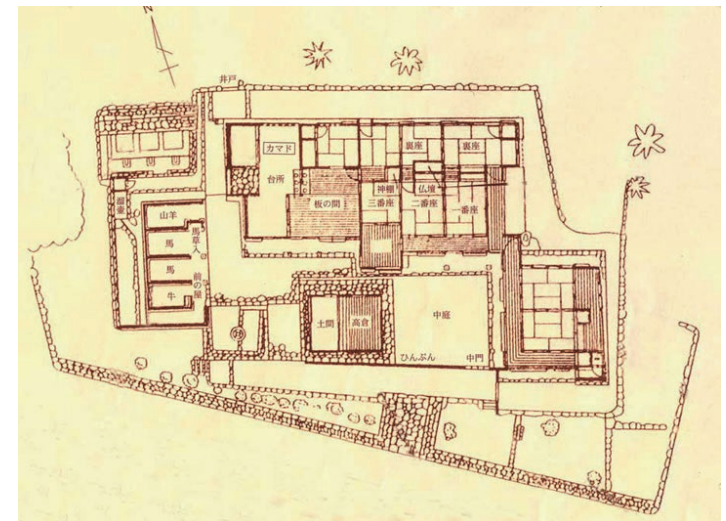
門の内外の仕切りで中国の屏風門がもとの「ヒンブン」を挟み、当時男性は右側から出入りし、女性は台所へ直通する左側を使用していたという。



畳間は六畳以下しか許されない



井戸が残されている



間取り図

荻道・大城（ウンジヨウ・ウフグシク）地区



イリヌカー（西の井泉）



イイヌカー（上の井泉）

フクギ並木、石垣、古いカーが自然環境と共存する沖縄の伝統的な集落風景が見られる。集落の歴史は古く、琉球王国誕生前から中城城の城下町として暮らしが成り立っていた。また、縄文後期に属する荻堂貝塚も残されている。

湧水が豊富であり、点在するカーは平成の名水百選に選ばれている上、村指定史跡や文化財等に指定されている。森岡ら(2017)によれば、住民間では、各泉の用途を飲み水用とその他用とに限定し使い分けていたようである。飲み水用としていたアガリヌカーとイリヌカーは、それぞれ東(日のアガリ)に居住する人、西(日のイリ)に居住する人が利用していた。実際、この二つには後からコンクリートによるゴミ除けが設けられ大切にされていた。他のカーは洗濯や水浴び、食材の下洗い等に用い、利用する村民の範囲は特に定まっていなかった。中には、自宅にカーを掘る者もあり、多額の資金を必要とすることから海外への出稼ぎ等を主とした富裕層が多かったという。



イリヌカー（西井泉）

このカーは大城集落の主に西側の住民が飲料水として利用していた。大正11年にカーの上にコンクリートでゴミ除け用の屋根が取り付けられた。

戦前は旧正月2日、現在は正月3日に字の有志が水の恵みに感謝して初御水（ハチウビー）の祈願をしている。築造年代は不明である。

中城城跡



正門を抜けると琉球石灰岩の切り石が聳える



ペリーが評した精巧なアーチ



積みなおしのための番号

世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つであり、丘陵を天然の要塞とし、300余ある沖縄のグスクの中でよく残っているとされている。連郭式の山城は六つの郭で構成されており、美しい曲線が築城技術の高さを物語っている。石積には野面積み、布積み、あいかた積みの3種類があり、随所にそのグラデーションが垣間見え、保存修復工事も実施されているようである。

石垣の上からの眺望では、明快な軸を持たない沖縄の集落の形がよく見てとれることや、その中で目をひく太陽光パネルについて参加者の間で意見がなされた。



布積み（左）とあいかた積み（右）のグラデーション



参加者の目をひいた中腹にある太陽光パネル

参加者（敬称略）：

金沢工大 片桐由希子
京都大 中村恭輔
熊本大 星野裕司
国土館大 二井昭佳・田口凌介・本堂隆之佑
東京大 五三裕太
東北大 平野勝也
名工大 中居楓子・松川涼・内生蔵達也・河合千里・木村駿哉
法政大 福井恒明・前澤健心・鴨潤矢
水辺総研 滝澤恭平
早稲田大 佐々木葉・小澤広直・シュユウジ・長澤歩
沖縄県庁 鐘溝遼治郎（佐々木葉研 OB）

参考・引用：

喜友名字誌 ちゅんなー / 世界遺産グスクふるさとのみち

森岡・金・濱田・樋野：カー（井泉）の空間分布に関する調査報告—沖縄県中頭郡北中城村大城・荻道地区を事例として—, 2017

2022年12月

早稲田大学 景観・デザイン研究室